

# 子どものことばのよごととクリーニング



室 谷 幸 吉

それは元気のいい声で良夫がお話の本を読んでいる。読み進めていく良夫の声を、私は聞くとともに聞いていて、オヤと思った。

——……タマゴは、おおきなくしゃみをひとつしてたち……

聞きつけた私は、何のことなのか、とつさに意味がはかりとれない。話の流れは、西洋童話で、王さまやその家来、お姫さまなどが出てきていたようであったが……。

良夫は、そこで読みよどみ、「タマゴは、大きなくしゃみを一つしてたちあがり……タマゴは、大きなくしゃみを一つしてたちあがると……」行きつもとどりつ、くり返し読みをしている。良夫の声には、二階の部屋にまでひびく気合がこもっているのだけれど、すばらしいのはこの声のひびきだけであって、かんじんの話のなかみ——つまり文章の意味はそっちのけなのだ。

彼の活発な読み声は、物語内容のイメージとは関係がない。彼は「意味」を読みとろうとしているのではなく、声だけで読んでいる。

良夫は今までに幾たびも、彼の大きな読み声について、母親から、ほめられてきた。

母親は本の中身について話し合おうとはしなかった。しきりにその「大きな声」を、ほめ上げてきた。そこで良夫は、長い期間の間に、自然と、中身をよみとらないでも、勇ましい声さえ張り上げていけば、すぐほめられるものであることを悟った。

良夫は、ホメラレル快感に魅せられて、昨日もきょうも、しきりに文字の音声化に努力する。結果、上述のような悪徳の持ち主となったのである。

彼の本には「タマゴ」ではなく、「王子（オウジ）」はおおきな

くしやみをひとつして、たちあがりました」と、書いてあった。

良夫は小学二年生だ。多少漢字の心得が持てる年齢になっていればこそ、「王子」を「玉子」と読みちがえるような、ユーモラスな読みちがいが出てくるわけだ。

文章の意味に即さないコトバの恣意的な読みちがいは、拾っていけばたくさんある。

——大きなスタマヤキ（目玉焼）をつくりました。

——……とてもわかりそう（かわいそう）です。

——友だちから、うまやまれる（うらやまれる）のでした。

——むすめは、ゆたかすがた（ゆかた姿）で……

——遠くの（遠のく）緑の森が……

ここで、ついでであるから、小学三～四年以上の子どもに見られた誤読で、意味がズレてしまった事例のいくつかを、私のメモ帳から拾い出してみよう。

——そんなひどい働かせ方は、がまんできる（できかねる）。

——ドナウは、実にきびしい（さびしい）川である。

——第二のふるさととして忘れない（忘れがたい）味がある。

——陶器の作品をうんこ（うこん）の布に包んで、箱に入れた。

——感情のかたまり（たかまり）が快かった。

——猛勉のけいけん（靈験）もあらたかに……

——「童心」という哲学的なむずかしい観念をながめる（あがめる）よりも……

——アンコライナ（アンナカレーニナ）という小説。

——やせすぎ（やせぎす）の女だった。

読みつまずきには、表記そのもののアイマイさにもとづく、つぎのようなものがある。語音のつながりを、一音ないし数音、下になで延ばすか、延ばさずに打ち切るかで、コトバが変化し、したがって文意が入れちがってしまう事態に、私たちはおりおり行きあたる。この種の混乱は（、）を一つ打つとか、分ち書き手法を援用するとかで、防げる場合も多い。

——家出してくる（家、出してくる）か（イエデしてくる）か。

——でも女子分がわからない……（オンナ・コブン）なのか（ジョシ

・ブン）なのか。

——建物のなかにはいれない……（中に入れない）か（中には、いれない）のか。△同類の混乱は、「そこにはいる」の叙述の場合にも生ずる▽

——よく朝めぎめて気がついた。……（翌朝）か（よく、朝）なのか。

——それでは、子どもらは、どうしてこんな読みちがいを、平気で

するのだろうか。その因ってくる源は、

1 文字の形を正確に識別しない。したがって示された通りの音声化を、文字に対して行なっていない。「音」へのうつしかえの際の誤りである。

2 文章の中身そのもの、ことがらのつながりを読んでいこうとしていない。つまりこの場合、子どもの頭の中で、文は一定の映像化を果たしていないのだ。この現象は、「映像」とは切り離された音声のひとり歩きなのである。その意味で「音声だけの浮上化現象」といえるだろう。

イビツな国語活動を、いつとはなく容認してしまう第一の原因として、「正しくない単語の発音」事物の名称の、誤った修得と「記憶」をあげたい。

テレビに、きれいなおしめさま（おひめさま）が出たよ。

わたし、きのうおとうさんにおごられ（おこられ）ちゃったに  
いさんも、よくおごるんだから。△気前よく食べ物などを、

ひとにふるまう、あのおごるとは意味がちがうのだ▽

ごみをふてる。（捨てる）

さっさとかたしなさい。（かたづけ）

のりえ（ぬりえ）しようよ。

電車のせんど（線路）。

のぞ（のど）がかわいたら、アイスクリームをたべた。

けんかのゲーン（原因）がわかったよ。

わたしは、ひとりでトランプ（トランプ）をしてあすんで（遊んで）いたの。パパとひち（七）ならべをしたの。

バスにいるいいじょ（停留所）にいった。

ライオンはけなもの（けだもの）です。

てぶくろをひり（しり）にあてたんだよ。

なかまにいられてむらった（もらった）の。

こういう発音上の不正は、実におどろくばかりに多い。「そば」のことを「オシヨバ」とあらわしたり、「お水」を指して、「オミジュ」とか「ミンミ」とか言う、舌回りの悪い幼児のカタコトからはじめると、これに類する誤りをもっていない子どもはないといえるのではないか。

これは接する人たちが（とりわけ、子どもと口頭接触の多い家族の人たちが）国語の音声面に關してたいへんルーズで、無関心であることのあらわれだといえないだろうか。多くの子どもらが、どうしてこのような誤りになじんでしまうのだろうか。

1 話し手であるオトナの発音が純正でない。だから、聞き手に回った子どもが、コトバを正しい音声として、あざやかにキヤッチすることができない。

2 聞き手（子ども）の側に、音声を正しくキヤッチしようという意識的な心がまえが低い。語音を聞きとる子どものアイマ

イさや軽率さが、国語の音声をやがめてしまう。

3 聞きとる耳、または音声をつくる声帯・舌・齒・唇・鼻などの器官に、何か器質的な欠陥があつて、正常な音声の獲得やその発出の妨げとなっている。

およそ以上のような原因があるのだろう。これらの原因が複合的にからみあい、その結果、子どもをまちがった発音やキタナイ音声の持ち主にしてしまうのであろう。だから、子どもを、正しく美しい国語の話し手・使い手にするためには、以上の原因をとり除くように気を配ってあげばいいわけである。

☆ ☆ ☆

さて、子どもが一つ一つの単語について、誤りのない、みごとな使い手になったとして、それでことがおわるだろうか。

わたしは、きのう、おばさんがうちへきました。

あした、おかあさんと、でばーとへいって、らいすかれーをとべました。

などと、平然と話したり、書いたりする子がいる。前の文に使われている単語、――

：「わたしは」「きのう」「おばさんが」「うちへ」「きました」

と、どの単語にも発音上の不正はない。だから単語としては合格である。後の文の単語、

「あした」「おかあさんと」「でばーとへ」「いって」「らい

すかれーを」「たべました」

についても同様に、単語そのものは合格である。

そこで、このように単語に狂いがないから、日本語の表現として「異議なく承認されるか」というと、そうはいかない。それはどうしてか。

日本語による表現は、単語として立ち現われるよりは、より多くいくつかの単語を結合させたもの $\parallel$ いわゆる文として存在する。単語の結合には、一定のキマリ（法則）があつて、この結合法則にしたがわない場合、いかに単語として、みごとな立派なコトバを使つていても、意味を表現する健全態とはみとめられなくなる。前の文も後の文も、一見してわかるように、自分がうつし取り、ひとにわからせたいことが $\parallel$ 文章の内容の時制（時間関係）において、スジはずれの結びつけ方をしているのである。この文のようなまとめ方は、「単語を並べていくにあつて、意味上の照応が悪い」のであることを、子どもらしきわかりわからせねばならない。

オバサンが、家へ来たのは「キノウ」という過ぎ去った日のことであることを、まずもつとハッキリとらえさせる。だから、この事実符合する文の主語は「オバサン」であつて、それ以外ではあり得ない。ところで、文を見ると、「オバサン」以外に「ワタシは」という主語が今一つ認められる。「キノウ・家に来た」

のは、オバサンであり、「ワタシは」であるというこの言い方は明らかに混乱であり誤っている。(混乱し、誤っているのは、実はいい方ではなくって、こういういい方を産生する「意識・認識の座」なのである)そこで、「オバサン」と「ワタシ」という複数の主人公を出すことはやめて、この場合は、主語を「オバサン」一人にしぼる。そして、

きのう、おばさんが、うちへきました。あるいは、

おばさんが、きのう、うちへきました。というふうに話しなおせよう。

また後の文について、デパートへ行くのがいつのことなのかを、ハッキリとらえておいて、その上に単語を配列させることが必要である。デパートへ行くのが「アシタ」である：「アシタ」というのは、まだ「来ない」未来(非現実であり仮定である)のことなのだから、その時にたべる(だろう)ライスカレーを「たべました」(過去)と表わすのは適切さを欠く。この場合、「たべる」状態は、…たべるだろう。…たべるかもしれない。…たべることにしている。

など、とにかく「まだたべおわっていない」ことを表わすいい方を選ぶべきであることをわからせる。したがって、「たべました」という動詞の過去形表現が、いい方としてまちがっていることがはつきりつかめる。そうしておいて、

— あした、おかあさんと、でばーとへいって、らいすかれーをたべることにしています。とか、

— あした、おかあさんとデパートへいって、ライスカレーを、たべるかもしれません。などと、いいかえさせるのである。

このような主・述の不均整は、意識の混淆を正すことを先立てねば、直されないもので、その点緻密な指導を必要とする。行動と、その行動の主体者ないしは被動者を、関連づけてスマートにつかみ取る心意活動を育てるように努めたいものである。

「夏休みになったら、どんなことをするつもりか。それを話してみよう」という提題に対して、サト子はつぎのように語る。

「おねえちゃまとサト子は、砂場でお山をつくった。パパも手つだってくれた。それから、パパとママとおねえちゃまと、あたしもいっしょに海にいった」

ここには未来と過去との混同がある。

五月六日のことだ。教室の時計が止まっていることをユカが知らせる。そこで、先生が、びっくり顔で「オヤ、この時計、まだ『子どもの日』なのかナ」という。ユカはそれに気づけて、

「じゃ、まだアシタなの？」とことばを返してきた。キノウ(子どもの日)と、アシタとの「時」の瞬間的混乱(勘ちがい)が読みとれる。